

宴の虫

水上勉

社会派小説シリーズ IV



の 宴

水上勉

社会派小説シリーズ IV



実業之日本社

蟲の宴

昭和五十三年五月二十五日 初版発行

著者 水上 勉

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三丁九

TEL 〇三(五六二)四三一一

振替東京一―三二六 一〇四

関西支局 大阪市北区曾崎根二―十二―七

梅田第一ビル

TEL 〇六(三二二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取替えいたします

蟲 の 宴

目 次

その朝	7
仕事	19
発端	29
白昼夢	39
その男	50
就職	65
出張	82
新しい職場	98
新事実	112
程島貞太郎	129
櫻の家	142

触れる……………	155
小金井の二人……………	171
古墳の村……………	188
中小企業……………	203
木箱……………	223
暗号……………	234
真実……………	254
追跡……………	268
捕捉……………	281
解説……………	297
祖田浩一……………	

カバー写真 秋山庄太郎
装幀 サン・プランニング

蟲の宴

その朝

窓からさしこんでくる朝陽が、橙いろの櫛目をみせて、ヘリのない、すりきれた畳の部屋の中を明るく照らしている。

一つしかない東向きの窓のカーテンも、反対側の六尺の押入れの襖も、赤茶けてよごれた上に破れているし、壁も柱もしみだらけである。汚ない部屋であつた。

来栖恭一は、目がさめると、蒲団を半分に折つただけで部屋の隅に押しやつた。彼は入口にさし入れてあつた新聞をとると、まばゆい光線の中に坐つて、たんねんに読みはじめた。

へどこかに、いい就職口がないものか……

来栖恭一は、求人欄とした三行広告のぎっしりこまかい活字がつまっている職業案内欄に限なく目を通した。

昨日も、一昨日も、目ぼしい先に見当をつけて行

つてみるのだが、どこからも採用決定の通知はきていなかった。

失業保険も切れて、もう二週間になる。

一日も早く勤め口をみつけないと、こんな汚ない六畳ひと間の部屋代も滞ってしまう。彼はいららしていた。

不意に、来栖はある広告に目をとめた。

求青年社員、当方著名繊維会社宣伝パンフレット製作、文筆堪能の士に限る。大学卒独身者歓迎、優遇委細面談。
としてある。

来栖恭一は苦笑した。大学卒独身者歓迎とした一文が気をひいたのである。

三行広告の文章一つでも、熟読玩味してみると、出稿者の性格や、会社の内容が想像できるとあつた。来栖は何ども足を棒にしているので、だいたいい見当がつくのだ。

へよし、今日はこの会社へ行ってみよう

相手方は、日本橋室町三丁目交差点神田寄山代ビル三階、東洋宣伝社としてあつた。交通も地下鉄があつて便利である。

来栖はいそいで玄関口の流しで顔を洗うと、洋服

に着がえ、机のひき出しから、履歴書と「いこい」をひと函とりだしてポケットに入れた。この豊島区としまく要町かなづようにある高台アパートを出た。

池袋の西口まで十分ほど歩いて、地下道に出た。そこから地下鉄乗車口へ出る。

八時三十分であった。ラッシュの男女の流れを吸いこんだり吐きだしたりしている隧道の中は暗い。その上に、ほこりが舞っている。

来栖は人ごみの中で、ふと足をとめた。隧道が丸い穴をあけて東口の広場の明りがみえる。その末ひろがりになった上の勾配の隅に立って、人待ち顔にこつちをみている男がいたからだ。

「おや……」

四十七、八のひょろりとした軀つきで、顎あごのながい変に白い顔をした男だった。その男は、来栖の方をみると会釈した。こんな暗い雑踏の中で、来栖の姿をみつけたすには、待っていたとしか受けとれなかった。男は来栖の方へ下りてきた。

「へやっぱりあの男だ……」

と来栖恭一は思った。

「やあ」

とその男は人ごみをかきわけるようにして来栖恭一の前に立つとにやりと口もとをくずした。

「どっちへおでかけですか」

馴れ馴れしく寄りそうてきて歩きだした。

背の高い男である。来栖は、昨日もこの男と会った。それは丸ノ内まるのうちのあるビルビルのせまい廊下であった。来栖と同じように求職者の列の中にいたのである。

「通知はこなかったでしょう？」

とその男はいった。

来栖ははじめてこの男に口をきいた。

「来ませんでした」

「それで」

「今日は、またべつの会社へ行ってみようと思って出てきたんです」

「来栖さん」

と男が足を止めていった。

「ちよっとつきあってくれませんか。お茶をごちそうしますよ」

どうして、この男が、自分の名を知っているの

か。来栖は変な気がした。あのとき、廊下で、係員に履歴書を渡した。到着順番に面接が受けつけられていた。男は、来栖よりも一人おいてうしろにいた。係員が、履歴書をみて、順番に名を呼んだのだ。そのときの名前をこの男はおぼえていたのだろうか。

しかし、この男は、変に馴れ馴れしいようである。半面、どこやら、得体の知れないものをもっている。きちんとした身装りも失業者のそれとは似つかわしくなかったし鼠色のツイードのオーバーも新品だ。靴もしゃれたかんじのチョコレート色でぴかぴか光っている。

「あんたに頼みがあるんだ」
と男は歩きながらいった。

「まあ、ちょっと、つきあって下さい。じつは、その、あなたの就職の話だが」

そういうと、映画館の前を通過して、まだあげたばかりのコーヒー店のガラス窓を、今しも白い上っ張りをついた少女が二人踏み台に上がって磨いている店をみつめてそっちへ急ぎ足になった。

「あすこへゆきましよう。なに、時間はとらせませ

ん」

来栖は、このところ、朝のコーヒーなどは呑んだことがない。コーヒー好きの来栖にとってはいま、少女が磨いているガラス窓の向う側に、ブラジルのコーヒー袋が陳列されているのが、ごくりと咽喉を鳴らせた。

男に尾いて、来栖は、まるで紐にくくられているみたいに、店へすい込まれた。

陽当りのいい通りに面した椅子をえらんで、男は歩いてゆく。少女が注文をききにきた。

「ぼくはコーヒーだが」

といつてから、

「来栖さん、あなたはなにしますか」

皮手袋をぬいで、五本の指をそろえ、それを卓の上にきちんとおいた。目尻を皺よせて微笑している。はじめてゆっくりみる男の顔であった。意外に眼が澄んでいた。

「ぼくもコーヒーをいただきます」

と来栖はいった。

「わたしは兵藤健吉（へいとうけんきち）というんです。おいそぎのところを無理にどうもお誘いしてすみませんな。こんな

ところでお会いしたのも、何かの縁ですよ」

男は、蒼白い、どこか陰気な顔を、ほころばせた。

「来栖さん、あなたは大学はどこですか」ときいた。

「Wです。国文科です」

と、来栖はこたえた。

来栖は兵藤健吉と名のるこの男と、いま、偶然に、地下道の出口で会ったことが気になった。

「自分のくるのを待っていたのではなかったのか……」

来栖は運ばれてきたコーヒー茶碗に砂糖壺をひきよせながらきいた。

「あなたはお近くにお住まいですか」

「巢鴨にいます。今朝は、ちょっとこの大和デパートに用事があったんです。そこに友人がおりましてね。何か勤め口があるというもんですから、やってきたんですが、少し早すぎたのです。ぶらぶらしていたところをあなたと会ったんです」

来栖は、先程、この男が、就職口のありそうなことをいったのは、自分自身のことをいったのか、と

思いなおしながら、

「それは結構な話ですね」

と、いった。

「いや、まだきまったわけではありませんからね。うらやましがられるほどありませんよ。ところで……」

と兵藤健吉は、このとき、ゆっくり来栖の顔を見た。

「あなたは、興洋リترون（こうようりとりん）という名の会社を知っていますか」

「興洋リترون？」

どこかできいたような会社だな、と来栖は思った。

「麻と化繊の交織でリترونという新纖維を発売している興洋紡績の販売会社なのですがね、馬喰町（ばくちやう）にあるんですが、そこに勤め口があるんですよ。あなたさえよかったら、お世話しますが」

へこの男はなにをいうのか、妙な男だぞ……

と来栖は思った。

自分が失職していて、他人の、しかも、つい昨日会ったばかりの素性の知れない来栖に職を世話しよ

うというのである。よほどお目出たい男にちがいなかった。

「あなたがおゆきになればいいじゃないですか」と来栖はいった。

「わたしですか……私ではだめなんです。あなたが国文科出だときいたから推薦するんですよ。その総務第五課というのが部署でしてね。私には向かない仕事ですから……」

と、兵藤健吉はいった。

「どうしてですか」

「私は営業畑でしてね、総務関係の仕事がいやなんですよ、何か私は商売をしたいのです。一日中机にしがみついているのは不得手でしてね」

勿体ないことをいう奴だと来栖は思った。

来栖はこれまで、いろいろと外交のアルバイトをしたことがあった。その場合、その会社の常務社員をどれほどうらやましく思ったことか知れやしない。総務課といえば、会社の重要なポストである。

兵藤健吉は営業畑がいいというけれども、来栖自身は、総務課の方が願ってもない職場と思えた。

「どんな仕事をするんですか、そこは」

「さあ、そいつは知りません。第五課というのは、最近新設された部署らしいんですよ。じつは、私の知人がその課長補佐をしておりましてね。笹島徹夫^{ささしまてつ}という人なんです。この間街でばったり会って私に來ないかというんですよ。私は話をきいて、どうも、気がすまないんです。どこかほかの中小企業でも、結構だから、販売方面でみっちり製品知識を教えてくれるような店が目あてだったもんだから断ったんですよ。月給取りよりも、歩合の方が、私らのような氣風の者には、やり甲斐があります」

と、兵藤健吉はピースをとりだすと来栖にすすめた。

来栖は自分のいこいをひきぬきながら、なるほど、と思った。この男はこれから商売をはじめたいのだろう。年齢もう五十近い。わずかな月給で時間をしぼられるのは厭なのかも知れない。

「あなたの知人は相当実権をもっておられるのでしょうかね」

「課長補佐ですから、発言権はあるはずですよ。なんでも、調査のようなことをするらしいんですよ。一日じゅう机に坐っている仕事ですよ」

来栖はだいたい想像はできた。たぶんその仕事は業界の調査機関ではないかと思う。興洋リトロンの販売といえば、メーカーと関係のあることだから、他の競争会社の製品だって、調査しなければならぬ仕事だってあるわけだ。

「どうせあそんでいるのである。この男のいうことは、どこか芯がありそうなところもみえる。かりに無駄だったとしても、行ってみて損ということはないだろう……」

来栖恭一は次第に兵藤の話に希望をもちはじめている自分を知った。

「よろしかったら、紹介状をかきますよ」

と、兵藤はそういって、オーバーの袖口をまくって腕時計をみながら、

「もう、ぼつぼつ、大和へ私は行かねばなりません。私は金物の世界が好きでしてね。友人を通じて打診してみるつもりなんです」

そういうと、少女に会計を命じた。来栖は、茶碗の底にのこっている冷えたコーヒースをすすった。

「兵藤さん、その人を紹介してくれませんか」

「いいですよ。行ってごらん下さい。その男は会っ

てくれるはずですよ」

兵藤健吉はポケットから名刺を一枚とりだして、笹島徹夫様とかき、そのうらに日本橋馬喰町の地図をかけた。

二人はそのコーヒー店を出た。陽が照って高いデパートのビルにアドバルーンがゆれていた。

「妙な男だな……」

と来栖恭一は思った。しかし、いま、このことなく落ちついた五十近い年輩の兵藤健吉と名の男が、いいかげんなことをいっているとは、どうしても思えなかった。初対面の来栖をだましたとしても、一文の得になるのではない。

「へたぶん、この男は根っからの親切心で世話してくれたのだろう。世の中にはそんなおせっかいな男がいるものだ……」

来栖恭一は朝の陽ざしの中で、活気を呈しはじめた駅前通りに出ると先にすたすた歩いてゆく、自分よりは二、三寸ほど背の高い兵藤健吉のうしろ姿をあらためてみた。

鼠色の新しいオーバーを着ている。それはこの男の年齢にふさわしい、好みのいい渋いものである。

仕立ても格調のある上品さを現わしているし、一見して、失業者とはどうしてもみえない。

先程コーヒー店の明るい窓ガラスの中でみた兵藤健吉の眼は病的なほど澄んでいた。

大和デパートの方角へ交差点を曲ろうとすると、広場の角でシグナルが赤にかわった。

「なに、新聞広告で大勢の人にまじって行くのところがいましてね。私のようなものの紹介にしろ、面接だけはちゃんとていねいにしてくれますよ。まじめに働きたいのだとおっしゃれば笹島という男はいい男ですからな、ひよっとしたら雇ってくれるかも知れません」

兵藤健吉は口もとをわずかばかりほころばせ、顔だけをふりむけていった。

信頼のおけそうな、自信たっぷりな目もとであった。

偶然が、来栖恭一のその日のスケジュールをかえる発端になった。

シグナルが青にかわった。

「ではいつてらっしゃい」

兵藤健吉はオーバーのポケットに手をつっこん

で、長身をやや前にかたむけて、大股に歩きだした。右肩上がりのちよっとくせのある歩き方であった。彼はまもなく、人ごみの中に消えた。

来栖恭一は、しばらくの間、そのうしろ姿を見送っていた。

——興洋リトロン。

来栖は口の中で二、三度つぶやいた。

おかしなものである。その未知の会社が、いま、来栖の頭の中で大きくひろがりはじめた。

来栖は都電に乘ろうと思った。室町三丁目の宣伝会社は後回しにしよう。まずそのリトロンへゆこう。回れ右して停留所の方にゆこうとすると赤電話が目にとびこんだ。

不意に、諷訪涼子ふうぼうりょうこのぽちゃつとした顔が頭にうかんだ。来栖は十円玉をさし入れて電話器をとると涼子のつとめている海産物問屋を呼びだした。

「妙なことがあった」

来栖恭一は電話線の向うに出てきた恋人のその女に明るい声でいった。

「興洋リトロンで知ってるかね」

「きいたような名前だわ」

と諏訪涼子はいった。

「その会社へ行ってみないかというんだが、偶然にその人に会ったんだ」

「その人って、だあれ」

「妙な男なんだ。昨日応募で出かけた列にいた人でね、自分がゆかないで、俺に世話をするというんだが……」

「大丈夫？ その人」

「大丈夫かどうかは知らない。しかし、行ってみて損をするということはないだろう。そんないいかげんなことをいつてるようにも思えないんだよ」

「気をつけてね」

と諏訪涼子は受話器の向うで不安そうな息をはいた。

「大丈夫さ、結果はまたあとで電話しよう、いつものところで五時に待っている」

「いいわ」

と諏訪涼子はいった。

受話器を置くと、来栖恭一は都電が今しも安全地帯のある始発点を緩慢に出ようとするのを見た。大急ぎで、乗降口に走った。

馬喰町へゆくには、神保町まで出なければならなかった。そこから乗りかえて両国ゆきに乘ればいい。

来栖恭一は三十分後に、馬喰町についた。彼は、兵藤健吉のくれた地図をたよりに浅草橋の方へ歩いた。ひどく混雑した通りである。洋品雑貨を売る問屋が軒並みならんでいた。舗道の上は荷物を背負った客でごったがえしている。活気のある問屋街の風景がそこにあつた。

都電通りから左に折れた。と、すぐそこに下駄履き式になった店舗の上にそびえた五階建てのビルがみえる。

興洋リトロンと書いたものはどこにも見当らなかった。来栖は地図をよくみながら歩いた。その五階建てのビルのわきだった。まるでそのビルにへばりついたように小さな二階家がある。

興洋リトロン販売株式会社

とペンキで書いた小さな横書きの看板がみえた。へ思ったより小さいところだな……

来栖恭一は間口四間ぐらいしかない古いしきた屋の店舗を眺めた。ガラス戸が閉めたきりになってい